

組合士

# アラカルト

調布管工土木事業協同組合

なかじま いちこ  
中嶋 姉子さん

## 組合運営のベテランと、プロと

### 時代の変化と向き合う組合

今回ご登場いただく中嶋姉子さんが勤務する調布管工土木事業協同組合は、昭和43年の設立で、今年が40周年の節目に当たる歴史ある組合である。

現在の組合員数は25。その大半は10人以下の小規模事業者の集まりとなっている。そこで、組合では受注事業と共同購買事業を組合事業の柱として据えている。特に、受注事業については、同組合が所在する調布市行政当局が主な取引先となっているが、これは組合の信頼性の証ともなっている。

とはいえ、同組合とその組合員を取り巻く経営環境、時代は大きく変化しつつある。

まず、現在の経済状況の厳しさである。一部では景況の回復も伝えられるが、同組合のような地域密着型の事業者にとっては回復の歩みは未だに重い。調布市は都市化、宅地化がますます進み、大型マンション建設などが盛んだが、建設時の水道工事等は大手デベロッパーが一括し

て手がけてしまい、なかなか地元事業者である組合員にまでは下りてこない。

しかも、水道工事はいわゆる3K業種の面もあるため、同組合でも組合員の高齢化が進む一方、後継者難という課題もある。

そのような状況を見据えながら、「業界は事業の面でも、人材の面でも成熟期を迎えていると言えます。そんな中で、今後、仕事に関しては、我々のような小規模事業者にとっては、メンテナン事業が伸びていくと組合でも予測しています」と中嶋さんは展望する。

もう一つ、同組合では市との事務委託契約の形で検針事業も受託している。同様の事例は都内では他に三鷹市と八王子市のみという珍しい事業である。ところが、これも「時代の流れの中で、都は事務委託契約を次第に解消する方向へ進んでいます。検針業務やメーター交換といった事務委託事業は、組合にとっては収益事業の柱であるだけにその影響は大きいです」と、組合としても時代の転換点にさしかかり、様々な模索、打開策を検

討中であるとのことである。

### 組合のベテラン、そして組合士として

中嶋さんは同組合奉職25年。検針業務の責任者と総務全般を担う中枢職員であり、組合の動向を把握しながら、これらを考える立場にもある。

そんな中嶋さんが組合士の資格を取得したのは、1988年のこと。前任の専務理事の「組合士という資格があるけれど、挑戦してみてもどうか」という勧めをきっかけに、「よし、自己研鑽のつもりでトライしてみよう」と取得のための勉強と受験に取り組んだ結果だった。

すでに工業簿記と建設業簿記の2級を組合士資格も得たことで、同組合における会計の専門家としてより磨きをかけることになったのである。

その効果は抜群だった。「組合士の勉強を通じて、『情報を読み込む』ということがよく身に付いた」という中嶋さんは、組合の会計処理を見直す作業の中、協同組合の課税免除事項が適用されるに

もかわならず、これまで適用してこなかった部分を発見。さっそく上へ提案し、組合の節税に一役を買ったのである。

「組合会計は一般的ではないので、税理士の先生でも見過ごす部分があります。組合士も含め、3つの会計関連資格を勉強したことが、当組合の業務の見直しのきっかけになっているとは思いますが」。中嶋さんは少々照れくさそうに、しかし、業務を通じて資格を活かしている実感を語ってくださった。

### これからも組合、組合員のために

同組合では、近隣の異業種組合や他市の同業種組合との情報交換や共同作業などを実施している。

「このような関連団体との情報交換も進めながら、今回の組合法改正で求められている法的対応と現場実務とのバランスをどう取るかを考えつつ、これからは何かを常に念頭に、業務に取り組んでいきたいと思っています。今後の抱負を中嶋さんはこのように見据えている。

